

富岡洋子作 「役立たず」

<前編>「みっともないやつ」

- (音楽) (導入音楽。塾の帰り道)
- 中学生 (口々に)「じゃあね」「バイバイ」「塾の宿題どこだっけ?」「9時からいい映画やるんだよ」「早く帰ろ」「バイバイ」(FO)
- 大沢勇一ナレーション おれ、青春中学2年、大沢勇一。今、塾から帰るとこなんだけど、おれんちまで電車と歩きで大体1時間くらいかかるんだ。
- (効果音) (走る電車の中。ナレーションのバックに)
- ナレーション うん、ちょっと遠いんだけど、進学率が高い塾だからって、親が決めたんだ。なんだって一人っ子だから、期待かかってるんだよな。分かる? この気持ち。ま、おれなりに頑張ってるつもりなんだけどね。
- 勇一 ん? あれ、何だ?
- 浮浪者 (酔っている)ざけんな。バカヤロー。触るんじゃねえ! おれ様を何だと思ってんだ!
- ナレーション それは、夜の公園の一隅に寝泊まりしている浮浪者だった。その人をグルリと数人の若い男の子が取り囲んでいる。同じ中学生みたいだ。
- 中学生 A 生きてんなよ。みっともねえなあ。
- B むかつくぜ。つたく!
- C 息吸うんじゃねえよ。空気がもったいねえ。
- ナレーション その中学生たちは、何の抵抗もしない、いや、抵抗できない浮浪者を、殴りけりしながら、ひどい言葉を吐きかけていた。顔には薄笑いを浮かべながら。しばらく、目が釘付けされたようにおれは見ていた。助けに行くなんてことは少しも考えなかった。「逃げたい」そう思うけど、足が震えて動かない。
- (効果音) (玄関のドアホン)
- 母 はーい。勇一君?
- 勇一 ただいま、お母さん。
- 母 お帰り。少し遅かったのね。電車、いつものに乗れなかったの?
- 勇一 え? うん。そう。
- 母 夜は電車の数が少なくなって困るわね。
- ナレーション なんとなく、ほんとのことが母に言えなかった。それにしても、イヤなもん見てしまった。何てひどいことするんだろ。
- (効果音) (勇一の部屋のドアをノックする音)
- 祖父 勇一、おるのか?
- 勇一 ああ、いるよ。いいよ、開けて。

(効果音) (ドアの開く音)

勇一 何、じいちゃん。まだ起きてたの？

祖父 ああ。今日はいいテレビをやってたんでねえ。中国のシルクロード。(FO)

ナレーション この人、おれのじいちゃん。おばあちゃんは5年前に亡くなって、もう76歳だから隠居なんだけど。東大を、じいちゃんのころは帝国大学、帝大って言ったらしいけど、そこを出て役所勤めしてたんだ。よくおれの勉強を見てくれる優しいじいちゃんだけど…。

祖父 ほお、今日はまた難しい計算だなあ。え～何々？ X^3 プラス X^2 マイナス $7X$ プラス 9 マイナス…。うーん、なんだか分からんな、今日は。

勇一 なーんだ、じいちゃん、できないの？ 役に立たないなあ。

祖父 ふむ。役に立たんかあ。役になあ。

ナレーション ちょっと寂しそうにそう言って、じいちゃんはおれの部屋を出ていった。その後ろ姿は、なんだかずいぶん年を食ったように見えた。そういえば、さっきの公園の浮浪者はどうなったのかなあ。いやいや、イヤなことを思い出すのはやめよう。さ、明日は日曜日だ。ゆっくり寝坊しようっと。CD 聴いて遊ぶぞ！

(音楽) (CD)

母 勇一君。勇一。勇一。いつまで寝てるの？ もうお昼よ。

勇一 (あくび)ええ、もう昼？ あれ、みどり、来てたの？

遠藤みどり おはよ、勇ちゃん。今日からしばらくお邪魔します。

ナレーション この女の子は、遠藤みどり。おれのいとこなんだ。夏休みの塾の強化授業で、おれんちからのほうが塾に近いので、夏休み中、うちに来ることになったんだ。同い年だけど、控えめに言ってもおれの2倍は口が達者だ。そこがちっとやりづらいいけど、教会に行っているせいか、優しく、気がついて、顔が浅黒いところは割り引いても、結構かわいいと内心は思ってたよな、うん。

祖父 勇一、腹減ってるだろ。みどりちゃんがマンジュウを買ってきてくれたんだ。食べるか？

勇一 お、サンキュー。あれ、父さんは？

母 ゴルフよ。休みは決まってるじゃない。

みどり ふーん。伯父さんはゴルフ。おじいちゃんはゲートボールだものね。いいわね、スポーツして。

祖父 いいやあ、もうわしみたいな年よりはやれんよ。ゲートボールも若いもんたちが中心だから。

勇一 ええ？ 若いもんって、幾つくらいの人たちさ。

祖父 そうだな、60歳くらいからかなあ。

勇一 ブ～。何だよ、60歳も70歳も変わんないじゃん。同じだよ。年寄りには変わりにないよ。

みどり ちよつと、勇ちゃん。失礼よ、そんな言い方。おじいちゃん、でもおじいちゃんはゲートボールしたいでしょ？

祖父 まあな。敬老会のほうでも、わしが行かんと心配して声はかけてくれるがなあ。(セキ込む)

母 あら、おじいちゃん、風邪かしら。少しお休みくださいな。さあ。

ナレーション その日、じいちゃんは38度の熱を出し、それから数日床に就いた。3日目のこと――。

母 おじいちゃん。はい、おかゆですよ。熱が下がってよかったですね。ただの風邪でもこたえますからねえ。

祖父 すまんなあ、世話かけて。勇夫^{いさお}はどうした、母さん？
(音楽) (不安そうなブリッジ)

母 え？ 勇夫さんは会社ですよ、おじいちゃん。

祖父 ふむ。そうか。

ナレーション その世、夕ご飯の時だった。

父 ん？ 父さんがそんなこと言ったのか？

母 ええ、あなた。おじいちゃんは、わたしを亡くなったおばあちゃんと勘違いしたんじゃないかしら。ビックリしたわ。

勇一 じいちゃんさ、お父さんのことも名前と呼んでたもんね。おかしいじゃん。
(効果音) (ガシャーンと物が割れる音)

母 キャー！ 何の音？

父 お父さん?!

祖父 ああ、服を着替えようとタンスを開けたら違うもんが落ちてきたんだ。

勇一 じいちゃん。それはタンスじゃなくて物入れじゃないか。何考えてんだよ。危ないな。

母 勇一。シツ、シーツ。

祖父 おお、そうだったか。どうも忘れっぽくなったかなあ。

父 お父さん。今日は何日か分かるかい？

祖父 ん？ はてなあ。

父 澄子。お父さんの着替えを手伝ってあげてくれ。

母 あ、はいはい。さ、おじいちゃん、お部屋へ行きましょう。

ナレーション 大変なことになった。あの頭も体もしっかりしていたじいちゃんがボケてきた。何かで読んだことがあるけど、今日が何日か分からなくなるのがボケの第一歩だって。お父さんはそれをテストしたんだ。

その日から闘いが始まった。じいちゃんのボケはどんどんひどくなって、しまいに家からフラフラ当てもなく外へ出ていくようになった。

(効果音) (玄関のチャイム)

近所の主婦 A 大沢さん、大沢さん。お宅のおじいちゃんがまた家に入ってきたのよ。どうにかして下さらない？

母 あら、どうもすみません。はい、ほんとに…。

近所の主婦 B (かぶって)大沢の奥さん、お宅のおじいちゃま、公園で滑り台の上から動かないんですってよ。

母 はい、今すぐ行きます。どうもすみません。

主婦 A 大沢さん。どうしてくれるの？ お宅のおじいちゃん、家の鉢植え壊して回って…。

(音楽) (悲しい音楽)

ナレーション どうとうじいちゃんは、両親に連れられて、病院に行くことになった。

みどり でもおじいちゃん、かわいそう。

勇一 ったく。長生きなんてするもんじゃないよな。

みどり そんな。勇ちゃん、ちょっとこの間から口が過ぎるじゃないの？ 自分がおじいちゃんのことをどれくらいバカにしてるか分かってるの？ あんなに勇ちゃんのことをかわいがってくれたのに。そんな自分勝手なのを“罪”って言うのよ。

勇一 うるせえな。しょうがねえだろ。あんなにおやじやおふくろに迷惑かけてんだから。おれだって恥ずかしいんだよ。

(効果音) (玄関のチャイム)

勇一 あ、お父さんたちだ。お帰り。

みどり おじいちゃん、お帰りなさい。

ナレーション じいちゃんは、妙におとなしかった。かわいがってたみどりを見ても、口を開かなかった。おれの言ったことが聞こえたのかな？

勇一 どうだったの、お父さん、病院は？

父 ああ、検査の結果、脳梗塞だと言われたよ。

勇一 脳…、梗塞？

みどり どんな病気なの？

母 脳がだんだんふさがってしまうんですって。どんどんボケていって…。

ナレーション 脳がふさがる…。脳細胞がどんどん壊れていく。それじゃまるで生きながら、頭の中が死んでゆくことじゃないか。じいちゃんはどうなるんだ？ おれんちは一体どうなるんだ？

母 わたし、もうお世話をする力がないわ。毎日毎日、おじいちゃんの後始末で頭が狂いそう。

勇一 おれだってそうだよ。学校へ行けば皆からじいちゃんのこと嫌味言われて、バカにされてるんだ。家に帰ってくれば、じいちゃんの“子守”だぜ。たまんないよ。

母 あなた、病院に入れてもらいましょうよ。病気なんですもの。ね？

父 いや、しかしなあ。医者も入院は勧めなかったじゃないか。まだ動けるんだし…。

勇一 動けるから余計困るんだよ。いっそ動けなくなってくれたほうがよっぽどましだよ。

みどり 勇ちゃん。ひどい。「大好きなじいちゃん」って、元気な時はあれほど自慢してたのに。血のつながったおじいちゃんによくそんなことが言えるわね。

勇一 みどりだって、じいちゃんのこと、「かわいそう。かわいそう」って言うけど、人の家のことだからそう言えるんだよ。自分の家にあんな“壊れた人間”、入れる気になるかよ。

父 勇一！

母 (ほぼ同時に)勇ちゃん！

みどり 勇ちゃん嫌い！ 大っ嫌いよ！

ナレーション “ひどいこと言った。言ってしまった”と思った。だけど、おれの心の中で、じいちゃんを邪魔だと思ふ気持ちがだんだん憎しみに変わっているのもほんとだった。ふと、いつの間にか夜の公園で浮浪者を殴りけりしてた中学生たちの姿が、自分の姿とダブった。

中学生たち (エコー)(口々に)「生きてんなよ。みっともねえなあ」「息吸うんじゃねえよ。もったいねえ」

みどり (エコー)そんな自分勝手なのを“罪”って言うのよ。“罪”って言うのよ！(多重エコー)

<後編>

ナレーション おれ、大沢勇一。青春中学2年。今、おれの頭の中に、いや、おれの家族全体の中に、ある病気のことが大きくのしかかっている。“脳梗塞”。脳がだんだんふさがっていく、つまり脳細胞がどんどん破壊されて、ボケて、体は動いても人間としては死んだも同然になってしまう病気なんだ。実は、76歳になるおれのじいちゃんが、その病気になっていて、家中てんやわんやだったんだ。

(回想)

近所の主婦 A 大沢さん、大沢さん。お宅のおじいちゃんがまた家に入ってきたのよ。どうにかしてくださらない？

母 あら、どうもすみません。はい、ほんとに…。

近所の主婦 B (かぶって)大沢の奥さん、お宅のおじいちゃま、公園で滑り台の上から動かないんですってよ。

母 はい、今すぐ行きます。どうもすみません。

主婦 A 大沢さん。どうしてくれるの？ お宅のおじいちゃん、家の鉢植え壊して回って…。(FO)

ナレーション あの前大を出て、役所の偉いところまで行ったじいちゃんが、頭もよくて勉強も教えてくれたじいちゃんが、ボケ老人に成り下がって役に立たなくなった。それどころか、近所の笑われもんになった。家中がだ。おれだって学校へ行ってはじいちゃんのことと恥ずかしい思いをさせられ、家に帰ればじいちゃんの子守の毎日だ。ほんとにじいちゃんは大きい赤ん坊みたいになってしまったんだ。“病気だからしょうがない”って始めはそう思ってたけど、だんだんじいちゃんが邪魔に感じてきた。そしてそれがどんどん膨らんで、憎らしくなってきたんだ。そんな自分が、いつかの夜の公園で浮浪者をいじめていた中学生とダブって見えてきた。

中学生(回想) (エコー)「生きてんなよ。みつともねえなあ。」「むかつくぜ。ったく。」「息吸うんじゃねえよ。空気がもったいねえ。」

ナレーション あの前中学生は、あの前おれがぞっとする恐ろしさで震えながら見ていた彼らの姿は、完ぺきに前のおれなんだ。いとこの遠藤みどりに、キリスト教ではそういう自分中心の気持ちを“罪”と言うんだと責められた。そして、その罪に対する神の報いは“死”だって。確かに前おれは、早く言えばじいちゃんに「この家に来てくれるな。死ね。」と言っていたんだ。我ながら、自分中心だと思う。だけど、だけど、本当にそう思ってしまったんだからしょうがないじゃないか。どうすりゃいいんだよ！(多重エコー)

教会員 A そう。じゃ、みどりちゃんも心配ね。

みどり うん。おじいちゃんの病気も心配だけど、家族の人たちのほうがもっと気になるの。なんて言うか、うーん…

教会員 B そうね。その心でしょ。おじいちゃんが入院して、楽にはなったけど、後味の悪さって言うか、責任逃れをってしまったみたいなあ…。

みどり そうそう。きっと罪意識があると思うのね。

教会員 A うん。お年寄りを抱えてるどの家庭も味わってる問題じゃないかなあ。さあ、ここはみどりちゃんの出番よ。頑張って。

教会員 B わたしたちも祈って応援してるから。

みどろ うん。

(効果音) (電車の中)

勇一 近寄るなよ。勘違いされるだろ。

みどり 何よ。だれも恋人同士なんて見ないわよ。何照れてんの？

勇一 うるせえな。何でお前とじいちゃんの見舞いに行かなきゃいけないんだよ、全く。

みどり ぶつぶつ言ってないの。もう駅よ。

ナレーション じいちゃんが入院して1週間目に、前おれは初めて見舞いに来た。みどりがしつこく、「一度は行きなさいよね」と言ったからだ。正直言って、じいちゃんが入院して、

家に平和が戻ってきてから、おれはじいちゃんのこと、忘れかけてたんだけど、心のどこかでは、みどりに言われるたびに、何となく“行かなきゃ”という負い目みたいなものを感じていたんだ。

みどり 261号室…。あ、ここだ。勇ちゃん、先入って。
勇一 え？ああ。(ノック)失礼します。
(効果音) (ドアの開く音)
勇一モノローグ あ！
ナレーション 一瞬、声にもならない驚きが口から出た。ドアを開けると、目に飛び込んできたのは、ほとんど同じ顔をした老人たちの姿だった。
みどり お、おじいちゃんはどこかしら？ こ、こんにちは。おじいちゃん？
ナレーション 同じ白いベッドに、どの人も白髪頭の角刈りで、よく顔をのぞき込まないと分からないくらいだ。
みどり あ、おじいちゃん、ここだったの。こんにちは、みどりよ。分かる？
祖父 うー…。うん。
勇一 じいちゃん、元気そうだね。これご飯の時に食べてって、お母さんから。
祖父 んー…。
みどり ね、勇ちゃん、写真出して、写真。
勇一 あ、ああ。じいちゃん、はいこれ。
みどり ベッドのわきに飾らしてもらおうと思って。家族の写真よ。早くよくなってね。みんな待ってるから。
祖父 (写真を見て)おー、わしと勇夫だなあ。
勇一 え、違うよ。これはお父さんで、こっちはおれだよ。勇一だよ。
祖父 家に帰りたいー。帰りたいー。
ナレーション じいちゃんのボケは前よりひどくなったようだ。昔の話を口に出したり、もうおれたちの顔や名前なんて頭からないみたいだ。視線もどこか宙を見てるみたいにハッキリしない。ショックだ。あそこまでって感じた。
おれたちは30分もいられなくて、そそくさと病院を出た。
みどり ショックだったね、勇ちゃん。わたし、おじいちゃんのおんな姿見たら、もう涙出そうだった。
勇一 うん。みんな同じ格好なんだもんね。男か女かだって分からないよ。気味が悪かったよ。お年寄りの^{ろうや}牢屋みたいだ。
みどり ほんと。かわいそうだわ、おじいちゃん。ねえ勇ちゃん、おじいちゃんを家に帰してあげられないかな。ダメかな。
勇一 ええ？ そりゃ、ちょっと、やっぱり…。
みどり 勇ちゃんの迷う気持ちも分かるの。大変だもんね。だけどおじいちゃん帰りがってた。ボケてほかのことは忘れちゃっても、家だけは忘れてないんだもん。値、

だから…。

ナレーション みどりの言うことに反対する気持ちは不思議と薄れていた。じいちゃんのある姿見せられたら、同情するのは当然だと思う。おれだって、「病院に入れちまえ！」って叫んだ手前、両親の痛みは感じてるんだ。だけど、また平和が壊されるのはごめんだって気もあるんだよね。

(効果音) (玄関のチャイム)

みどり ただいま、伯母さん。ん？

(効果音) (再びチャイム)

母 勝手すぎますよ！ あなたは少ししか家にいないからそんなことが言えるんだわ。わたしの身にもなってよ。またあんな地獄の毎日なんて…。わたしは絶対反対ですからね。

父 仕方ないだろ。仕事があるんだから。父はもう先が長くないんだ。せめて家で送ってやろうじゃないか。

母 ^{しも}下の世話もしなくちゃならないのよ。あなたには血のつながった親でも、わたしにはしよせん他人なんですから。

父 何?!

(効果音) (平手打ち)

勇一 い、行こうぜ。(そそくさと立ち去る)

みどり 勇ちゃん。でも伯父さんたち…。

(効果音) (バックに街の雑踏)

みどり 勇ちゃん、話してもいい？

勇一 …

みどり あ、あの、伯母さんの気持ちも分かる気がする。伯父さんの気持ちも。

勇一 みつともねえな。

みどり え？

勇一 よぼよぼ生きてる年寄りもみつともないけど、自分のことしか考えないやつらは、もっとみつともなくて情けないよ！

みどり そうね。ほんとに。

勇一 父さんや母さんのことだけじゃない。その中にはおれだって入ってたよな。何でみんなこうなんだ？ 何かがおかしいんだよ！

みどり 勇ちゃん…。

勇一 人間てなんなんだろう？ 苦労して頑張って、いい学校出ても、年取れば邪魔者扱いされて、そのうち迷惑かけながら死んでいくんだよな。だからあれか。ああなるまでが勝負ってことか。それまでに思いっきり楽しんだほうが勝ちか。…それでいいのかな？

みどり そうだとしたら、ずいぶんつまらない人生だなあ。わたしは違うと思う。お年より

は人生の先輩よ。邪魔者だなんて。尊敬しなくちゃ。おじいちゃん、優しかった。わたしが行くと、いつも「みどり、色が白くなったな」って言ってくれた。色が黒いのをわたしが気にしてるのをちゃんと分かってくれてたのね。何でもそう。たくさん苦労してきたから、人の弱さや心の痛みが分かるのよね、きっと。勇ちゃんのうちの中で、今一番必要なのは、あのおじいちゃんの“思いやり”の心じゃないかな。偉そうなこと言ってごめん。

ナレーション そうだった。じいちゃんは、いつも嫌な顔一つしないで、おれの勉強を見てくれたし、将来のこと、友達とのこと、それとなくアドバイスしてくれてたっけ。

みどり ね、勇ちゃん。おじいちゃんのこと、今でも嫌い？ 憎らしい？

勇一 うん。好きだよ。謝りたいくらいだよ。でも… もう分かってもらえないよ、あんな状態じゃ。

みどり そんなことない。聖書にね、こんな神様の言葉があるのよ。おじいちゃんのこと考えながら読んで、偶然見つけたんだけど、(聖書をめくる)「わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。4 あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。」(イザヤ 46:3-4)って。祈ろう、勇ちゃん。神様、きっと勇ちゃんの気持ち、おじいちゃんに伝えてくださる！

勇一 祈る？ みどりの信じているキリスト教の神様にか？

みどり うん。神様は目に見えないけど、生きていて、働いてくださるの。心を込めてイエス様に祈ろうよ。(祈る)天の神様…。(FO)

ナレーション みどりの気迫に押されて、“もしかしたら”と思いながら、おれはその祈りの言葉に耳を傾け始めた。そしていつの間にか、みどりの祈りに心を合わせて、俺も祈っていた。

数日たって、じいちゃんは家に帰ってきた。病状はよくなって、せめて家で死なせてあげたいという家族で出した答えだった。

(音楽) (静かな安らぎに満ちた BGM)

父 父さん、ほら、庭の柿が今年もおいしそうに赤くなってきたよ。

母 本当。熟れたら取って、みんなで食べましょうね。

祖父 んー。んー。

みどり え、なあに、おじいちゃん？

祖父 役に立ちたいなあ。勇夫や澄子さんのなあ。勇一やみどりちゃんのなあ。少しでも役に…なあ。

勇一 じいちゃん…！

ナレーション じいちゃんは、前におれが「役に立たない」って言ったこと、気にしてたんだ。じ

いちゃんの胸には、その一言が刃物みたいに突き刺さっていたんだ。

勇一　　じいちゃん、ごめん…。じいちゃんはすごいよ。おれのこと、ほんとによく教えてくれたもん。かわいがってくれたもん。じいちゃん、ごめんよ(泣きじゃくる)

祖父　　(うれしそうに)勇一。勇一…。

ナレーション　　それから間もなく、じいちゃんは息を引き取った。なんとも言えない穏やかな顔して。神様、ありがとう。神様は、おれに謝るチャンスを与えてくれた。一瞬でもじいちゃんを正気に戻してくれて。

勇一モノローグ　　神様はやっぱり生きてるんだ…。

ナレーション　　それは、おれが初めて味わった、不思議な実感だった。――

<完>